一　次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

人間のさまざまな不安の中で、死への不安というのは根源的(イ)な不安だと言えるでしょう。命あるものは、みんなその命を失うときのことを想像しては、誰(だれ)もが不安になる。

人間の命には限りがあります。逆に、もし永遠に生きていられると保証されれば、生きていることにうんざりしてしまうかもしれません。いずれにしても、自分はいつかこの世を去っていく。そういう実感があればこそ、①人間は命というものを、これほどいとおしく感じるのではないでしょうか。

大伴家持(おおとものやかもち)に、

「うららうらに、照(ロ)れる春日に　ひばりあがり　こころかなしも　ひとりしおもへば」

という歌があります。これは『万葉集』のあまりにも有名な歌のひとつです。②

最初、中学生のときに読んだときは、「こころかなし」というのがピンときませんでした。「うららうら」で「春の日」なのだから、「こころ〔　③　〕」じゃないのか、と。思い浮(う)かぶのは、青い空に白い雲。緑の野原が広がって、ピーチクパーチクと元気な声でひばりが空高く飛び上がっていく情景(ハ)です。

見るからにこころが弾(はず)むような春ののどかな風景のなかで、「こころかなしも」の「かなし」とはいったい何か。

万葉時代の「かなし」は、現代の「悲しい」とは意味が違(ちが)う、ということはそのとき先生が教えてくれました。④天地万物(ばんぶつ)のさまざまな存在感が身にしみてくるような感覚を、「かなし」といいます。あるいは、「いとし」という言葉とも重なっていると思います。この歌の場合、作者の大伴家持がそこに感じているいとしさ、切実な気持ちの背後には、目の前の春が、いつかは失われてしまうものだ、という感覚があるからではないか。

〔　⑤　〕はあっというまにすぎてゆく。やがてすぐに灼熱(しゃくねつ)の夏、そして枯野(かれの)の広がる秋になり、雪のつもる冬になっていくだろう。いまは空高くさえずっているあの若いひばりも、やがて年老いて、空高くは飛べなくなっていくだろう。

そんなことが頭のなかに浮かんできますと、目の前の春の風景がのどかであればあるほど、人生もあっという間にすぎ去(ニ)って帰ってこないことを痛感(ホ)させられる。自分もともに歳月(さいげつ)を重ねていき、この世から離(はな)れていかなければならない。いとおしければいとおしいほど、⑥それと別れるということが目の前に見えてくる。そこで感じるのが「かなし」という感覚だと思うのです。

つまり、⑦「かなし」という感覚は、存在の不条理みたいなものを体で感じるとき、そこから生まれてくるものではないでしょうか。

（五木寛之『不安の力』より）

問一　波線部イ～ホの漢字の読みをそれぞれ答えなさい。

問二　傍線部①「人間は命というものを、これほどいとおしく感じる」とありますが、それはなぜだと筆者は説明していますか。文章中の語句を使い、二十五字以内で答えなさい。

問三　傍線部②「ピンときませんでした」とありますが、中学生であった筆者が「ピンと」こなかった理由の説明として、最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　歌によまれている風景が、「かなし」さ以上に、さみしさを感じさせるものだったから。
イ　歌によまれている風景が、どうしようもなくせつないものに感じられたから。
ウ　歌によまれている風景が、どうしても春らしく感じられないと思ったから。
エ　歌によまれている風景が、どうしても「かなし」いものだとは思えなかったから。

問四　空欄〔③〕に入る語句としても最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　はずかし　**イ**　やさし　**ウ**　うれし　**エ**　おそろし

問五　傍線部④「天地万物のさまざまな存在感」を言い換えている部分を傍線部以降より探し、十二字で抜き出しなさい。

問六　空欄〔⑤〕に入る語句を、文章中より漢字一字で抜き出しなさい。

問七　傍線部⑥「それ」の説明として適切でないものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア　未来　**イ**　目の前の春　**ウ**　人生　**エ**　これから来る夏　**オ**　ひばりの若さ

問八　傍線部⑦「『かなし』という感覚」の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　失われてしまうものに対する、何とかとどめたいという望みや期待。
イ　失われてしまうものに対する、愛着や、どうしようもないせつなさ。
ウ　失われてしまうものに対する、悲しみや、やり場のない憎しみ。
エ　失われてしまうものに対する、尊敬の念や、言いようのない恐怖。

問九　本文の内容と合うものを、次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア　死は誰にも訪れることを実感しているため、人は誰しも死に不安を感じていない。
イ　筆者は、中学生当時、大伴家持の歌を読み、家持の感情に非常に共感を覚えた。
ウ　大伴家持が歌によんだ気持ちの背後には、失われてゆくものへのいとしさがあった。
エ　歌の中の「かなし」とは、現代の「悲しい」以上の悲しさをあらわすものである。
オ　歌の中の「かなし」の意味には、「いとし」という意味合いも含まれている。

二　次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

▼学生である「わたし」は、スーパーのバーゲンセールで、ウサギの着ぐるみを着てバイトをすることになった。

「あらあら、バイトさん？　ご苦労さま」
更衣室で着ぐるみに足を突っ込んだところで、うしろから声をかけられた。
ぽっちゃりとした顔を〔　A　〕笑わせて、ちょうどうちの母ぐらいの歳の小母さんが立っ

ていた。まっすぐロッカーに近づいて、扉を開ける。名札には「田中」とあった。
「そうなんです。一日だけですが、よろしくお願いします」
「こちらこそ」
田中さんはロッカーから取り出したライトブルーの制服に着替える。そしてわたしの着ぐるみを差して言った。
「それ、一人で着るの大変よ。手伝ってあげようか」（一）
引っ張ったり伸ばしたり、二人がかりでもけっこうなテマだった。ようやく身体をオサめることができたときには、わたしはうっすら汗ばんでいた。まだ完全にウサギになりきる必要はなかったので、頭の部分だけは、フードのように背中までタらしてある。
「蒸し暑いし、これでけっこう重たいから、肩が凝るわよ。歩くときには足元に気をつけてね。普段の自分よりもふたまわりぐらい大きくなっているわけだから、思いがけないところにぶつかったりするの」（二）
「田中さんも、着ぐるみを着たことがあるんですか？」
小母さんは、狭いロッカー室に響き渡る明るい声で笑った。「うん。だって五年前これを着たのはあたしだもの」（三）
わあ、そうだったのか。そういえば、田中さんも小柄だ。
「五年のあいだにこのとおり、太っちゃってね」（四）
田中さんはおなかをぽんぽんと叩いた。おっしゃるとおり、ぷっくりしている。
「十二キロも増えちゃったのよ。それでも店長は最初、あたしにもういっぺんこれを着ろって言ったんだけどね。そんなの無理無理。他の人たちじゃもっと無理。でね、どっちにしろバイトさんを頼むことは決まってたから、だったらその人に着てもらおうってことになったわけよ」
ごめんなさいねェと、陽気に謝ってくれた。わたしはえへらえへらと愛想笑いしながら、①それだったら、せめてこのウサギさんを洗っておいてほしかったと、おなかの底で力を込めて考えていた。昨日、精一杯手入れしたけれど、やっぱり着ぐるみの内側はじめっとしているのだ。腕や脚は、素肌がムズ痒い感じがする。
「頭もかぶってみる？今のうちに歩く練習をしておいた方がいいわよ」
田中さんが着ぐるみの頭の部分を持ち上げてくれたので、わたしはそこにもぐりこむみたいに身をよじり、「　B　」とかぶった。
「どう？　視界が狭くなるから、ちょっと怖い感じがするわよね、最初は」
のぞき穴の位置に両目をあてて、わたしは更衣室のなかを見た。ロッカーが並んでいて、金網の入った窓ガラスが見える。確かに視界は狭まってしまったけれど、それほど苦には感じない。むしろ息苦しい方が気になった。空気穴は、顎の下にひとつ空いているだけだ。「あら、可愛いわぁ」
田中さんはヨロコんでいる。動くケバイがするし、声は斜め前の方から聞こえる。だけど姿が見えない。②かわりにヘンなものが見えた。ライトブルーの制服が、どこにも見当たらない。灰色の、「　C　」した毛のかたまりだ。すごく大きい。田中さんと同じくらいのサイズだ。それがわたしのすぐそばに立っている。
よく見ると、それはクマの着ぐるみだった。
「田中さん？」
「あたしはここよ。やっぱり見えにくい？」
灰色のクマの着ぐるみが、田中さんの声で返事をしながら、もっさりもっさりと動いてわた

しの正面に来た。
田中さん。これ田中さん？　なんで着ぐるみを着てるの？いつ着たの？
「あの……」
思わず手を伸ばし、灰色の毛に触ろうとしたら、身体がよろけてしまった。
③「大丈夫？」
わたしを支えてくれた。田中さんの声でしゃべる、この灰色のクマさんが。
いったいどういうことだ？
「ちょっと、ちょっとこれをとってください！」
わたしは、まるで身体に火がついたみたいに悲鳴をあげて、ウサギの頭を脱ぎ捨てた。すると目の前に田中さんがいた。ライトブルーの制服を着た、ぽっちゃりした小母さんがいた。びっくりして目を瞠り、しり込みしかけている。
わたしは息を切らしていた。
「どうしたの？　着ぐるみの内側に何かついてた？　虫でもいた？」
田中さんの問いかけを無視して、④わたしはもう一度ウサギの頭をかぶった。かぶるときは目を閉じていて、
「田中さん、そこから動かないでね！」
「え？　ええ」
目を開けてみると、そこにはやっぱり灰色のクマがいた。

（宮部みゆき『チヨ子』より）

問一　波線部イ～ホのカタカナを漢字に直しなさい。

問二　空欄〔A〕～〔C〕に入る語句として適当なものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　すっぽり　　**イ**　ぱったり　　**ウ**　むくむく　　**エ**　ふくふく

問三　傍線部①「おなかの底で力を込めて考えていた」とありますが、ここから読み取れる「わたし」の感情として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　陽気に謝る田中さんに少しの不満を覚えたが、言っても仕方がないと思い我慢した。
イ　今よりやせていた田中さんの着ぐるみ姿を想像し、思わず笑いたくなったが我慢した。
ウ　田中さんに愛想笑いしかできない自分が情けなくて、泣きそうになったが我慢した。
エ　着ぐるみは思いのほか着心地が悪く、何となく気味の悪い感じもしたが、我慢した。

問四　傍線部②「ヘンなもの」とは何ですか、本文中より十字で抜き出しなさい。

問五　傍線部③「わたしを……クマさんが。」に用いられている表現技法として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　体言止め　　**イ**　直喩　　**ウ**　隠喩　　**エ**　倒置法

問六　傍線部④「わたしはもう一度ウサギの頭をかぶった」とありますが、なぜですか。その理由を、文章中の語句を使い、三十字以内で答えなさい。

問七　傍線部⑤「目を開けてみると、……クマがいた」とありますが、この時の「わたし」の気持ちの説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　目の前の恐ろしい光景に、とてつもない恐怖感を抱き、今にも逃げ出したい気持ち。
イ　目の前の大変楽しそうな光景に、笑いがこみ上げてきて、愉快で仕方がない気持ち。
ウ　目の前の光景は予想とまったく違ったものであったため、とても驚いている気持ち。
エ　目の前の光景は予想していたものではあるが、全く信じられず、驚いている気持ち。

問八　次の一文は、本文中の（一）～（四）のどこに入るものですか、適切な箇所を選び、漢数字で答えなさい。

実感のこもったアドバイスだ。

問九　この文章の特徴の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　平凡ではあるが幸せな「わたし」の日常生活が、穏やかに語られている。
イ　突然起こった不思議な出来事が、「わたし」によって感情豊かに語られている。
ウ　平凡な日常生活が、独特の視点から、ユーモラスに語られている。
エ　日常の中に起こった幻想的な出来事が、作者の目線から淡々と語られている。